



私どもの国語問題

藤原與一

1 何が私どもの国語問題であろうか

「国語問題」というのが、編集部から与えられた題目である。何が、私どもの国語問題であろうか。国語国字問題などと、世間で言われることは、すでに久しい。しかし、国語生活の大衆の大衆には、そのような論議は、ほとんどひびいていない。論者は論じ、大衆はそれに無縁といったようなありさまである。

これでは、たとえどんな解決案が示されても、論としての案にしかならない。ところで、一方、新聞雑誌や学校教育などに、早くもそのような案が実施されるとなると、これはしぜんに新しい大きな力となって、しだいに、そのようなものが世に通ることにもなる。が、このような時も、大衆の大衆は、なお開眼されてはいないことが多い。

だが、いつ、その周辺を見まわしても、「毎日の生活で、およそ、ことばなどというものは、全然、考えてみたこともない」人たち、全然、考えてみようともしない人々が、じつに多いのを知るのである。さて、その人々も、生活については、むろん、日々、深刻に考えている。選挙といえ、人の意見発表に耳をかたむけもする。つまり、考える生活はしているのである。しかし、それについて、考えるために、ことばを考えなくてはならないことには、気づいていないのである。要するに、国語生活の大衆は、多く、ことばを自覚しない生活をしている。

（二二二）、国語問題の解決といふからには、こういう状況が無視されてはならない。こういう状態が無視されたまま、国語問題が解決されたりしてはならない。いったい、国語問題は、こういう状況の中から、とりあげてこなくてはならないものであろう。すくなくとも、国語生活のこういう底辺をよく見きわめたところで、わが国語生活をどのように改善したらよいかの国語問題をとりあげてくるのでなくては、問題も、ほんとうの問題にはならない。

2 国民みんなの国語問題

国語問題は、国民みんなの問題である。このことを徹底させることが、国語政策の一番の仕事だと思ふ。

今日は、いわゆる国語問題として、たとえば文字に関すること（漢字・ローマ字・かなづかい・送りがな・など）が論じられている。しかし、文字をほとんど書かなくて、あるいは読みもしなくて、毎日の国語生活をしている国民大衆のなんと多いことか。しかもこの多数の人たちは、たしかに、根づよく、国語というものをささえている。この人たちの地盤的な役わりと存在とを無視して、国語というものを考えることはできない。書きことばをどう書きあらわすかなどということも、多くの大衆の話しことばの地盤にささえられた書きことばのことを考えているはずのものである。それゆえ、どんな国語問題も、そういう人たちの国語生活まで見あわさなければ、真の国語問題にはならないのである。にもかかわらず、今日は、そのような認識によつたのではない、ある部分の国語生活状況について、やかましう、国語問題としてとりあげられている。じつは、一部分の国語問題にすぎない。

今は、国民全衆のための国語問題が考えられて、その問題点が、正しく指摘されることが、さしせまうてほしいこととである。現在の国語政策としては、近來のいわゆる国語問題のとりあげかたが片よつてゐること、したがって、甲論乙駁で、容易には穏当中正な、根本的な解決策の立たないことを言うべきである。これは政策の立案そのことではないけれども、国語政策の態度としては、重要な態度であると思う。国語問題のありかた、全国語生活に立脚する基本問題を発見すべきことの急務とは、いくら強調されても、強調のされずこしはない。

現段階では、全国語生活の立脚する基本的な国語問題として、どのようなことが考えられようか。

3 国語自覚を！

国語生活の大衆の大衆は、なにぶんにも、ことばを考えない（思わない）生活をしている。方言大衆を考えてみてよい。この人たちは、毎日、ただはたらくのにいそがしく、無形の言語に心を開くことなどはまずないありさまである。ラジオを聞いても、ことばを聞くよりも、娯楽そのことをうけとっている。新聞を見たとしても、事件そのことをうけとる。文章を見ても、その文字には抱泥しても、ことばに目を開くことはほとんどない。

そういえば、知識人と言われる人たちでも、時に、はなはだしく無反省・無自覚である。ことに、話しことばで、それがいちじるしい。ことばの品格を説く人が、一方では、気づかずに、返事の「ウン。」や「フン。」を連発している。人がたいくつしていても、知らないで長談義をやる。要談に前おきは必要と、きめたりもしている。書きことばにしても「政府」「与党」「野党」などの言いかたを、ほとんどなれあいておこなっている。「野党」というようなことばは、気づいてみれば、変なことばである。

一般に、ことばに目を開き、耳を開き、心を開くことがない。ないということがいいすぎなら、自他の、ことばの生活への、反省と観察とがよわい。これは、国民全衆の、国語生活の根底がよわいということであろう。これでは、ほかの何をどう考えようとしても、あぶなつかしいことである。

私どもは、第一には、国民全衆が、国語自覚を切にすべきことを、今日の国語問題として考えてよいのではないか。国語自覚が一般に切になれば、まず、国民一般に、国語生活の常識、常識的態度が、できたということになろう。これで、当今言われているようなさまざまの国語問題も、国民全体の中で、ほんとうに解決されることになる。

4 考える国語生活を！

第二には、考える国語生活をさかんにすべきことを、基本的な国語問題としてよいと思う。自覚することは、考えることの第一歩である。自覚すれば、だれしも、毎日のことばの生活を、自分のこととして、

本気で考えるようにならう。そこでさらに、話し聞き、読み書く、じつさいのいとなみを、よく考えてするようにと、強調したのである。考える国語生活が、国民全衆の、習慣、あるいは日常の生活になればよいと思う。

考えることのでいじきは言うまでもない。人の理性とか知性とかいうことも、つまりは、考える力ということであろう。小林秀雄氏は、「生きていく以上、考えなければしょうがないじゃないか。」(朝日新聞)と言っている。人間を人間らしくするものは、考えるということであろう。社会生活の基礎も、文化の基本も、人々が考えるということにあると思う。

国語生活にしても、考えない国語生活は、よわい国語生活である。考える国語生活から、国語生活の良識が生まれ。——すてに、考えることを愛好しはじめたら、もう良識である。このような良識が、国民全衆にいきわたれば、どんな国語問題も、しぜんに解決されるであろう。言いかえれば、解決の方向が、おのずから決定されるはずである。このような状況下では、むしろ、国語問題の提起も、きわめて慎重なものになつてくるはずである。恣意的な問題提起などは、全然、反省をおこさないからである。

近來の国語問題では、世論が、右にゆれ、左にゆれしている。しかもそれは、論者たちの世界のことであつて、もの言わぬ多くの国民大衆は、どちらにもかかわりなく、ことばを考えない生活をしている。これらは、国民全体の、考える国語生活の理想から、いかに遠いことか。

考えることのでいじきは知つていても、じつさいには考えようとしなないことも多い。学校の先生の場合でも、もちろん、国語を自覚してはられる。考えることのでいじさも、みずから説いてもられる。だのに、考えなくてはならぬようにしむけられると、そんなにいつもいつも考えていられるものかと言う。ことばを、考えてつかっているのを見、聞くと、あんなにしていたのではしんがつかれるだろう。と思う。批評授業についても、一感想として、「子どもたちは、先生に、いつもいつも、あんなにこまかく考えさせられていたのでは、やりきれないだろう。」と言う。こういう先生たちは、考えることを何か特別なこととしていられるかのようである。

考えることは、もっと、あたりまえのことなのではないか。考えることが苦しいのではなくて、考えないで機械化することが、ほんとうは、たいへん苦しいのだと思う。考えないでしゃべったあととはさびしい。考えて書いたつもりで

も、書き得ていない時、みずから、考えのたりなさを味わう。考えないと、じつさい、自分ながら、ものがおもしろくなくなる。毎日の学習指導でも、きのうもきょうも同じような指導だと、その機械的な無味乾燥に、自分ながらやりきれなくなる。

考えること、考える国語生活は、どんな場合でも、本来、たのしいことのはずである。——人間としての、心のよこびが、そこで味わえるはずである。このような、考える国語生活の、普遍化することが望ましい。

5 考える国語生活

考える国語生活のたのしさに、いくらかふれてみよう。

書くことにも、一つのことを書く時、書くことばを、よく考えてつかうようにする。一たん書きあげても、ほかに書きあらわしかたはないかと、なお念を入れて考えてみる。つぎには、無条件で書きかえにかかってみる。すると、二度めには、たしかに、いっそうよい書きあらわしかたができる。やればやるほど、やり進めば進めるほど、ものはよくなる。無限によくなる。だから、もうこれぞよいということはあり得ない。表現の探究の無限の道ゆきである。これは、一方から言えば苦行かもしれないけれども、他方から言えば、心の開拓の味わえる、まことにたのしいことである。自己発展のあとづけられることこそ、心のよろこび・たのしみではないか。

話すのにも、その場のふんいきに合わせて、抑揚ひとつにして、まじめな気分をだすようにこころみてみるというようなことをすると、「自分ながら気持ちよく話せた」と、後悔しないうれしさを味わうことができる。考えてはものを言う、これは、一こと一こと、ものを造型するようなものである。自分で自分の作品をうみ出すのである。てきとをながめていたら、そこでまた、つぎのよい作品をうみ出すことができる。

書いていても話していても、たしかに、表現したことはがもたになつて、またよい考えがおこる。一つのことばをつかったのが、きつかけなりはずみになつて、また、つぎの考えとことばがうまれる。そのように、自己のものをうみ出すのは、たのしいことである。さて、うみ出すものがことばにあるとするならば、そのことばを重んじなければなら

い。ことを考える生活態度は、たいせつである。

思想のつよきはどこにあるか。考えぬいたことばで述べられているところにあると思う。考えぬくことは、自分のからだで徹底的に考えるということである。これは実践ということにほかならない。実践性のない考えなど、いわゆる机上の空論で、思想ではない。人が、その人の生活の中で、実践しぬいた考えが、思想の名にあたいする思想であらう。実践をこえて、余分に言いすぎたら、もう、生きた思想にはならない。生活に即して、表現のことばを考えることが、真の、「ことを考える」ということである。

自己の生活に忠実に、表現のことばを考えることばは、だれにでもできるにちがいない。一人の職人のひとであつても、考えて、自己の生活の意見を、その人らしいことばのえりごのみで語つたとしたら、それはその人のりつばな思想である。表現のよろこびは、ことを考えることを愛好することによつて、人々みな、味わうことができる。

読んでも聞いても、そのうけとることばを、考えて、一々味わいわかるようにすれば、ずいぶんとたのしいことだらう。「多子家族ごとりと炬燵誰か蹴る」という一句があつたとする。「ごとりと」という一ことばも、「ごとんと」とか、「ごとりと」とかいうのと、くらべて、考えてうけとつてみると、早くも一句のおもしろみにはいつていくことができる。

人の発表のことばなどを聞いていても、当人には関係なく、じつにたのしいことがある。討論の席などで、一人の人が、「本質を考えないで、ものの分類ができますか？」と言つたとする。そうすると、他の一人が、また、「本質がわからなければ、分類はできないものでしょうか？」と言つたとする。こんな時、聞いていて、それぞれを、じっくり考えてみればみるほど、おもしろい。考えて聞くことのたのしさである。

むずかしい研究発表のことばでなくても、日常のあいさつことば、出あいがしらの「オハヨー コサイマシタ。」の「タ」一つが、考えてみればおもしろい。こんなおもしろさの発見が、また、自分の表現意欲をかりたてる。「こんどはひとつ、こういう言いかたをしてみよう。」ということなどになる。国語生活の良識の活動である。

6 国語問題の考えかた

私は、基本的な国語問題ということを行い、二つの項目をとりあげてきた。けつきよくは、「考える国語生活を！」ということが、国民全衆のための、大もとの国語問題になるかと思う。(これは、一般課題としては、「考える生活を！」ということである。)——ぜひ、そのことを実現しなければならぬという意味で、これが今日の国語問題であるというのである。

近來とりあげられているような国語問題、——国語生活の民主化のための敬語の簡素化とか、学術用語の改善とか、口語文・左よこがきの活用とか、漢字制限問題・ローマ字問題・かなづかい問題・送りがな問題とかは、どこまでも、国民全衆の「考える国語生活」を推進することの上で、考えられなくてはならないと思う。

このような見地に立てば、たとえば送りがな法その他について、一つの解決案を提示するという時も、つぎのような考えかたをしたのがよいと思う。一挙に多くのことをとりきめて、これは本則、これは例外というようにするよりも、国民大衆のふつうの言語感情が、まぎれなくうけとりそうなところを、がっちりとおさえて、まずはそこを明示するようにするのである。言いかえれば、例外をまとめたりするような考えかたにまでは走らないで、例外などはいらない中心部だけを、はつきりとおさえる考えかたをするのである。ひとえに、中心部のところを明示する。これに、国民の常識が目をむけてくれ、国民の良識が活動するようになれば幸である。細かなことをとりきめることなどは、いそがない方がよい。色濃い部分、中心部が示されれば、人々は、そこをまぎれなくうけとることができ、かつはしげんに、他を問題にするようになる。その、他の部分では、また、世論のもり上がりを待つのである。

漢字のことも、制限々々というのがいけなかつた。文字は、書きことばでものを書く時に、利用すべきものである。書き手としては、漢字も、必要に応じて、存分につかいたいものである。一口に、あたまから、制限と言われると、おもしろくない。ましてや、千八百いく字と言われても、ぴんとはこない。その数量の必然性がわからないのである。私どもにとつてだいなことは、やさしくわかりやすく書くということである。やさしくすれば、漢字はおのずから少くてすむ。結果として、漢字の使用はへつてくる。適正になつてくる。制限、ではない。

制限という考えかたは、国語生活者の一部には、当ててよい考えかたかもしれない。が、国語生活者の全体については、制限という必要はない。やはり、「よく考えて、わかりやすい言いかたをするように！」と強調すればよからう。

この中心点を強調し、あわせて、漢字のつかいかたはよく考えねばならぬと説けばよい。制限の数を数として示すことは、いそぐ必要がない。むしろ、「こんなふうによさしく書けば、こういう漢字はつかわなくてすむ。」などと、適當な事例をたくさん提出してみるのが、よくはないかと思う。そのさいに、「こうしてみると、比較的よくつかわれるのは、この程度の、これ程の漢字である。」と示してはどうかと思う。この数が八百字であろうといく字であろうとかまわらない。提出の趣旨は、けつして、制限ではないのである。「適當な基準」、といつても、もう、「制限字数」、といふのはちがう。国語問題を処理する考えかたをよく考えることがたいせつである。

残念なことに、今日の国語問題の論議には、論議そのことに、解決すべき基本的な国語問題の附着しているのが見られる。

注 こういう、漢字利用の態度の教育がおこなわれれば、一般民間の、文字に縁のうすい人たちの文字觀念——ただわけもなく漢字を尊んで、これを本字といつたりすることなど——も、しだいに是正されよう。漢字に関する国語問題の提起が、このように、漢字生活に遠い人たちをも同時に教育しようとな、基本的な問題提起であれば、何よりよいことだと思ふ。

7 む す び

「国語問題」は、国民全衆の、国語生活の改善と進歩とを考えるものでなくてはならない。この点で私どもは、世上のいわゆる国語問題に対しても、一人の国語生活者として、問題の遠・近（↑自分の身からの）を、つねに考えてみる必要がある。遠くにある問題については、ことに、今、急進的な解決策を重んじる必要はないだろう。

どのような国語問題の場合も、解決の方法としては、やはり、漸進解決のいきかたが、本位とされるべきものである。

国語問題が、国民のじつさいの国語生活から遊離したところで論じられたりしてはいけない。「私どもの国語問題」という考えかたはだいである。

さて、国語教育者は、この私どもの国語問題をしだいに解決していくべき任務を持っている。